

「キリスト教神学における象徴主義と図像学」—（その6）
A. Dura-Europos (No. 3)

杉瀬祐

Summary

Christian Symbolism and Its Iconography (6) A. Dura-Europos (No. 3)

Yu Sugise

This paper follows my former papers, vol. 31, No. 3 (March, 1985) and vol. 32, No. 2 (December, 1985).

The Christian Community House in Dura-Europos.

Contents:

1. Preface : Wall Paintings of the Christian Community House in Dura.
2. Good Shepherd and Adam & Eve in the Baptistry.
3. Healing of the Paralytic.
4. Peter Walking on Water.
5. Tomb and Five Women.
6. Conclusion.

In this paper, the paintings of the Christian Community House in Dura-Europos are discussed in their significance of symbolism and in their liturgical connection, and how far different they are from the Early Western (Roman) Christian art which is represented in Sarcophagi. The characteristics of these fresco in Dara are, may I say, Christ-centric and eschatological, reflecting the Syrian Christian faith.

1. Dura のキリスト教集会所の壁画

Dura-Europos におけるユダヤ教 Synagogue とキリスト教集会所の発掘発見及びその意義については本稿の（その 1）（1985 年 3 月），（その 2）（1985 年 12 月），（『神戸女学院大学論集』第 31 卷第 3 号，同第 32 卷第 2 号）において、比較的詳しく記した。その後の私の研究は、Dura のユダヤ教 Synagogue に描かれている壁画群を、他のユダヤ教絵画や美術と比較して、



図 1 キリスト教礼拝堂の発掘、右端が洗礼室
C. Hopkins : The Discovery of Dura-Europos. Yale
U. P., 1979

その神学的分析をすること、第 2 に、Dura におけるさまざまな Syncretism の神殿や神像を近隣の Palmyra におけるそれらと比較研究すること、それによって当時の通商交易の状況やローマ駐屯軍の兵士や土地の住民との関係などがより具体的になり、文化・思想の流れがより明確に把握されるであろうと考えたのであった。こうした準備段階を経て、最古の「家の教会」

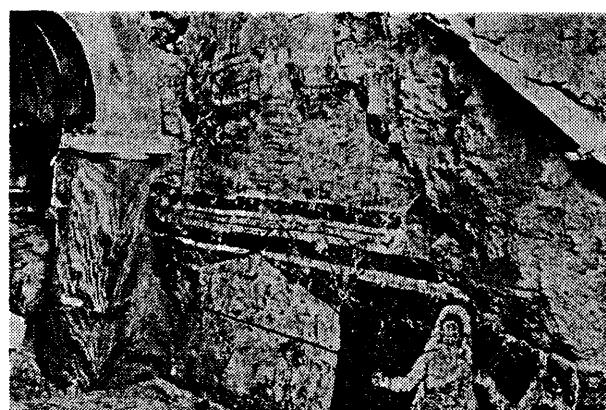


図 2 キリスト教洗礼室の北壁、墓の前の 3 人のマリヤ、上のパネルにガリラヤ湖上のキリストが描かれている。
C. Hopkins : The Discovery of Dura-Europos (op. cit.)

と言われる Dura におけるキリスト教集会所の壁画の解釈や建物構造と儀礼との関係が当時の文化的・精神的状況を背景にして、より正確な推論がなされうるであろうと考えたのであった。なぜなら、この最古のキリスト教教会に関しては、地理的理由もあって、関連する資料は乏しく、どうしてもかなりの推論によらざるをえない事情があるからである。その他、コプト関係の資料を集めたり、バビロニアの Talmud、特にその第2部をなす Gemaraを探し求めたりした。しかし菲才に加えて怠慢のため範囲が拡がるばかりで、未だに十分な整理やまとめも出来ないでいる始末である。上記のそれらの事柄は何時の日にか機会をえて、まとめて発表したいと願っているが、今回はとりあえず Dura のキリスト教集会所の壁画群について追加の所見を記したいと思う。

2. 洗礼室 Baptistry の壁画「よき羊飼」

洗礼室はこの集会所の重要な中心となっている。洗礼用の水槽の正面に「よき羊飼」のフレスコ画が描かれている。

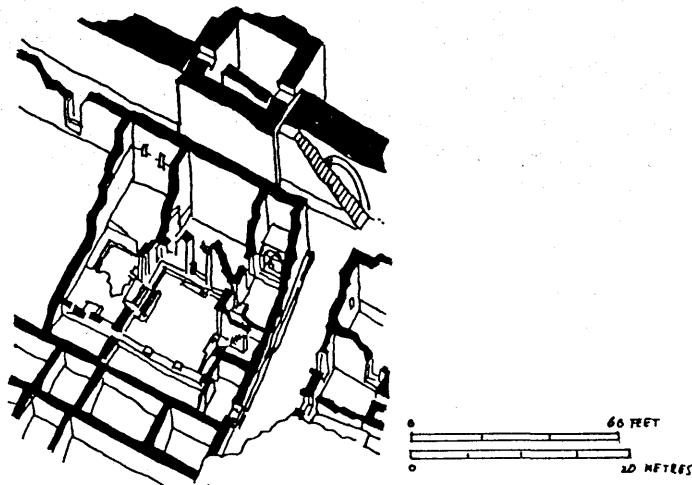


図 3 Dura-Europos (Salhiyeh), Christian community house, shortly after 200 and c. 230, Isometric view.
Richard Krautheimer: Early Christian and Byzantine Architecture. Penguin Books, 1965

「よき羊飼」は初期キリスト教美術において最も一般的な図柄と言える。ヨハネ10：11，“わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる”を中心としてヘブル13：20，“永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引き上げられた平和の神が……”やヨハネ21：15以下“わたしの小羊を養いなさい”，その他詩篇23：1，イザヤ40：11，エレミヤ3：15，エゼキエル34：11-16，Iペテロ2：25など、聖書的背景は豊富であり、特に羊飼はダビデと直接的に結びつき、キリストとダビデはオーバーラップして彫刻や絵画で表現される。通常、われわれが見馴れている「よき羊飼」のイメージは、ひとりの若い羊飼が羊を肩にのせている姿であり、素朴な形は正面を向いて直立しているが、次第にローマ風になって片膝を曲げ体を少しひねってポーズをとるようになる。欧米人は、こうしたリア



図4 洗礼室の壁画

Kurt Weitzmann ed.: *Age of Spirituality*, The Metropolitan Museum of Art & Princeton, 1978

リストラクタリックな変化を図像学的に進歩したと見做すのが普通だが、Iconologyとしてはそうした見解には疑問の余地があろう。しかし、その問題は改めて詳しく論じることとして、この洗礼室の「よき羊飼」は、肩に羊をのせた羊飼だけでなく、他に十四匹近い羊の群が描かれている。図5～7にも明らかなように、羊の群を伴った図形は必ずしも珍しいものではなく、本来、絵画的にはこうした図柄が自然であり、本筋であったかもしれない。彫刻になると羊の群は省略されて羊を肩にした羊飼だけが表現されるようになると考えられるであろう。



図5



図6



図7

Edward Hulme: *Symbolism in Christian Art*. Brandford Press, 1976

羊飼はキリストであり、ダビデでもあるわけだが、羊飼はキリスト教独特の表象ではなく、先に引用した旧約聖書の箇所にも頻出するように、昔から広く遊牧の民には馴染み深い表象であり、アヌビス（エジプト）、アッティス（フリュギア）、パリス、タンムーズとマルドゥック（バビロニア）、ヘルメス、アポロ、あるいは牧神パンなどの表象として用いられ、内容的にも指導者、あるいは靈魂導師などのイメージを含んでいる（アト・ド・フリース『イメージ・シ

ンボル事典』大修館書店, 1984.3, p. 574, その他参照)。

Dura のキリスト教集会所, 洗礼室の「よき羊飼」の他に類例を見ない特長は, 羊飼の左下に「アダムとイヴ」が描かれている点である。すなわち, エデンの楽園の木々に囲まれ, 知識の樹を中にはさんでアダムとイヴがやや小さく描かれている。こうした図形は, 例えば Yves

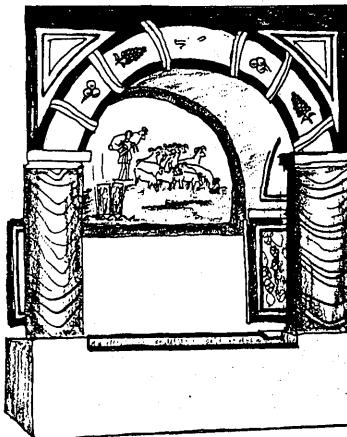


図8 キリスト教集会所の洗礼室 Baptistry
Yale University による復元模型



図9 Tracing of fresco from the baptistery of Dura Europos, with Good Shepherd and Adam and Eve.
New Haven, Yale University Art Gallery
K. Weitzmann ed.: Age of Spirituality (op. cit.)

Christe, Tania Velmans, Hanna Losowska, Roland Recht: *Art in the Christian World 300–1500, A Handbook of Styles & Forms*. Faber & Faber, 1982 や Kurt Weitzmann ed.: *Age of Spirituality, Late Antique and Early Christian Art, Third to Seventh Century*. The Metropolitan Museum of Art & Princeton, 1978. その他いろいろの Iconography の本を参照しても, 同様の発想をもった図形は出てこない。周知のサルコファギに彫られた諸図形は, 故人の表象とは別に, キリストの年代記的な図像や, ヨナその他, 贈いや復活・永生に関した図像が絵巻物風に並列されているのが普通である。後で見る「中風の男の

「癒し」のように、病で寝ている姿と癒されて自分でベッドをかついで歩き出している姿と、出来事の経過を並列して表現する手法は他にも多い。しかし、この「よき羊飼」と「アダムとイヴ」のような救済史的アレゴリカルな並列の表現は他には見当たらないのである。ある者は Haggadah の挿画による発想ではなかろうか、と言う。しかし、私の管見ではそれに該当するような適当な例は発見できなかった。むしろ、コプトなどの織物類に類似の発想例がある可能性が大きいのではないかと思って調べてみたが、そこにも適当例は見出しえなかった。要するに、類似した図形を発見することが問題なのではなく、このような発想の背後にある思想や伝承を把握することが大切な点である。私が Textile に類似例を求めるようになったのは、その発想の自由さに注目したからであり、Haggadah の挿画に原点を見出そうとする人は、説話の関連性や救済史的な関連性に注目するからであろう。

初期のキリスト教美術において、東方では主として旧約聖書からの引用例が多い。それはユダヤ教的背景や伝説が強いためであろう。それに反して、西方ではかなり初期から新約聖書からの引用例が出てくる。カタコンベからサルコファガスへの展開の中で、その図形や表現様式の変化は別として、葬儀に関連した発想が多く、その信仰・思想の中心はキリストの復活—それも不死・永生—であると言ってよいであろう。他方、東方ではユダヤ教諸派などの影響のためか、終末論的・暗示思想的傾向が強い。また、改めて言うまでもないことながら、コンスタンティヌス帝時代以前と以後、すなわちキリスト教公認以前と以後とでは、キリスト教美術も大きく変化する。公認以前では素人的な発想・技巧、そして隠匿性が強く、公認以後はキリスト信者ではない石工その他の技術者がクリスチャンの依頼主の発想や注文をうけて、世俗的なものを作っていたやり方の中でキリスト教美術を製作してゆく。そしてその規模も建築・彫刻・絵画などのすべての部門において、また相互に関連しあいながら、以前とは比較にならないほど大きくなっている。しかし、それは主として、ローマを中心とした西方世界においてである。

われわれが今とりあげている Dura のキリスト教集会所は、もともと普通の個人の住宅であったものを改造・転用したものであり、洗礼室のフレスコ画も東方的色彩の濃い、また素的なものである。

Sir Lawrence Gowing ed.: A History of Art. Macmillan, London, 1983 の中には次のように記されている。

“Dura の洗礼室の絵画は最も古いカタコンベの芸術と同じ時期に属する。「よき羊飼とアダム・イヴ」、「中風の男の癒し」、「水上を歩くペテロ」、「墓（？）の傍の 3 人の女性」などの絵画は、—そこでは或る個人の感覚で処理されているが—、ローマ帝国の最東端においても、カタコンベと全く同じ形式で救いのサイクル（一連の救いの出来事の図式）が存在していたことを証拠づけるものである。新約聖書のイラストレーションというものは、入念に仕上げられた労作という形では、ローマ帝国全体に亘ってある一貫性をもって 3 世紀に確立した、と結論づけることができるであろう。何を媒体としてこうした情景（図柄）が発展し伝播していくかは

不明である。いかなる場所で、いかなる社会階層の中でキリスト教美術が始まったかについても、すべては推論の枠を越えることはできない。しかし、最も単純に結論を出すとすれば、伝統的に埋葬の記念碑などについて権限をもっていたり、装飾の施された環境の中で礼拝されることを期待していたような人々が、その改宗後も引続いて芸術家たちの後援者になった、と想像することであろう。芸術の伝統的な類型が持続されたということは、こういうふうに考えてみるとよく説明できるのではなかろうか。恐らく、こうしたパトロンたちは教会の中でも過激な立場の人ではなく、排他的な傾向もなく、注意深くその宗教的信念を選んだことであろう。後期ローマの宗教的折衷主義の衝撃的な例は、皇帝 Alexander Severus (222–35) に見ることができる。彼は自らの宮廷の小礼拝堂 (*lararium*) の中に、神格化された皇帝たちや、哲学者の Apollonius of Tyana, キリスト、アブラハム、オルフェウス、アレクサンダー大王などの聖人像をおいたのである。”(pp. 360–361)

これはかなり大胆な、また短絡的な意見と言わねばならない。ローマではその意見は一部該当するところもあるであろうが、Dura のキリスト教集会所には該当しない。Kurt Weitzmann ed. : *Age of Spirituality* (op. cit.) p. 396 には、“Dura のフレスコ画、そして恐らく Cleveland statuettes も、埋葬用の美術には属さない。反対に、西方では第3世紀のキリスト教美術は葬儀用美術として少なくとも第4世紀までは保存された”と記されている。上記のクリーヴランド美術館所蔵の一連のヨナの像（四体）(図10–13) もまた、東方における初期キリスト教美術の起源を証明するものであり、第3世紀の初めには、シリアにおいては、西方よりももっと幅広い聖書的イメージのレパートリーがあったことを、K. Weitzmann は語っている。

「アダムとイヴ」の並記されている神学的思想や Iconology としての問題は、他の壁画を一



図10 Jonah swallowed



図11 Jonah cast up

Kurt Weitzmann ed. : *Age of Spirituality* (op. cit.)



図12 Jonah under the gourd vine



図13 Jonah praying



図14 Good Shepherd

Kurt Weitzmann ed.: Age of Spirituality (ibid.)

通り見た上で、総括的に論じることとして、ここでは東方起源のキリスト教美術があつたことを確認しておくにとどめる。

3. 「中風の男の癒し」

洗礼室の西側に、「よき羊飼とアダム・イヴ」のフレスコ画が正面にあり、その下に浸礼用の洗礼水槽がある。北側には、最もよく保存されている三面の壁画がある。まず西寄りの上段に「中風の男の癒し」があり、その右に「水上歩行」の絵があり、その両方の下部一面に「墓と5人の女」があり、その右手に、すなわち東側には、現在は殆ど損傷して残っていないが、「墓と5人の女」の続きがあったと想像される。そして全体では少なくとも8枚以上の壁画が描かれていたと考えられる。

さて、「中風の男の癒し」は、マルコ2：1-12（並行記事、マタイ9：2-8、ルカ5：18-26）に基づくもので、ベッドに横たわる病人と起き上がって自分でベッドを担いでいる癒された男とが並行して描かれ、キリストは右手をあげて癒された男を指さしている。キリストにはヒゲがなく、後光も描かれていない。「中風の男の癒し」は初期のキリスト教美術では馴染み深いテーマのひとつであり、作例は多い。しかし、サルコファガスなどに彫られた聖書物語の連作場面では癒されて既にベッドを担いでいる男の姿が表現されているのが普通で、このようにベッドに横たわっている姿と起き上がっている姿が並列しているものは少ない。それは彫刻とフレスコ画との差によるものである。また、物語の進行状態（あるいは始めと終り）を並列して表現する手法は古くからあり、Dura の Jewish Synagogue の壁画群の中にもあったし、日本の絵巻物などでも多く用いられている。「中風の男の癒し」のテーマが好んで用いられた背後には、病気というものの深刻さが身近かな事柄としてあったと言えるであろう。今日のように医学や医療設備の進歩した状況においても病気は深刻である。まして古代においては、病気に伴う死の不安や苦痛は重大な関心事であったに違いない。中風の者をイエスの許まで運んでやる

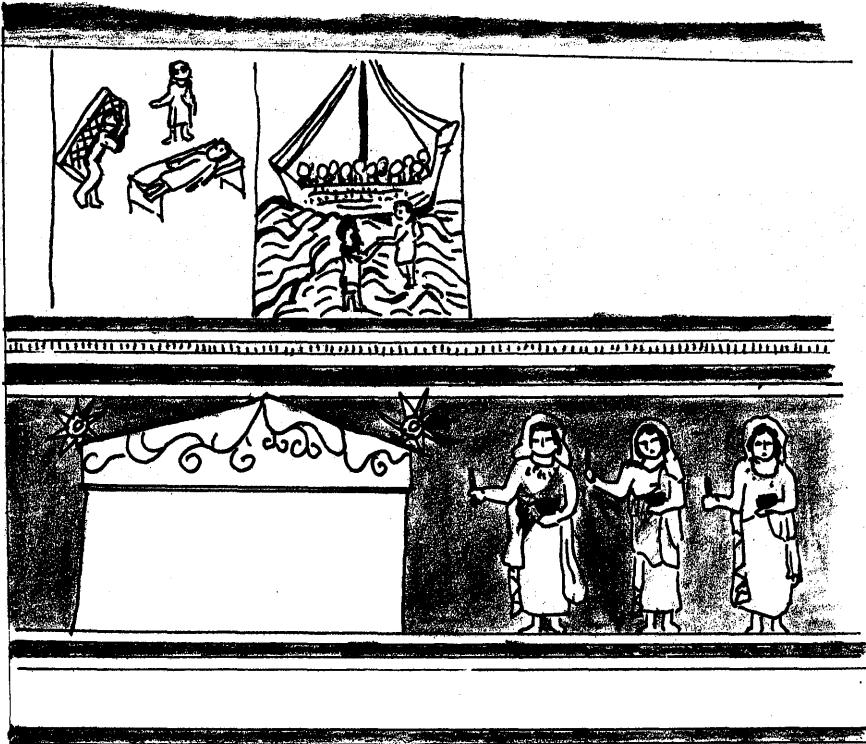


図15 上段 「中風の男の癒し」と「ペテロの水上歩行」
 下段 「キリストの墓と聖なる女たち」
 Yale Univ. の復元図による略図

親切心や友情が人々にあっても、彼らは病いを癒す力は持っていない。さらに病いや死は親切心やヒューマニズムの限界をわれわれに見せつける。すなわち、われわれは病むとき、自分が病み、死ぬとき、自分が死ぬのであって、究極的には人間は孤独であることを露呈する。それらは罪の価値である。キリストはこうした病いを根源的に癒すだけでなく、死にも勝ち、人間の孤独やニヒリズムを究極的に克服して、人の絆を新しく結び給うた方である。しかし、ここではそれ以上に、“あなたの罪は赦された”と宣言し給う方であるということが、この洗礼室には一層ふさわしく、かつ重要なことであろう。

4. 「水の上を歩くペテロ」

マタイ14：22-34（マルコ6：45-51、ヨハネ6：15-21）をテキストとした絵である。図像学的に、舟は救いの小舟、すなわち教会を表し、波はこの世の荒波を示す。教会はこの世の只中に救いの小舟として存在し、この世のさまざまな試練によって溺れ、水の中に呑み込まれようとする人々を救い上げ、彼岸（神の国）へと運ぶのである。キリストは平然として荒ぶる波の上を歩いて、教会の主として舟に乗り込もうとする。弟子たちは初め幽霊と思っておじ惑い恐れる。しかしイエスが“しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない”と声をかけたので、弟子たちはイエスを認識して安心する。そこには復活のキリストを認識できないで、お

じ感い恐れた弟子たちの姿が重なっている。復活の場合もキリストが声をかけロゴスとして自らを示し自ら働きかけることによって、弟子たちの信仰の眼は開かれるのである。マタイ福音書にはさらにこのペテロの挿話がつけ加えられる。いかにも好奇心旺盛でお人好しのペテロらしく、“主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせて下さい”イエスは“おいでなさい”と言う。そこでペテロは舟から下り、水の上を歩いてイエスのところへ行ったが、風を見て恐ろしくなり、溺れかける。イエスはすぐ手を伸ばしてペテロを助け“信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか”と言う。ふたりが舟に乗り込むと、風は止んでしまった。舟の中にいた者たちはイエスを拝して“ほんとうに、あなたは神の子です”と言った。

マタイの付加した部分は、この説話のもつ中心点を一層わかり易くパラフレーズしていると言える。救い主イエス・キリスト、そして教会の主であるキリストとこの世との関係は、ペテロの行動によって、この世の波風を見てあれこれ怯えるのではなく、一筋にキリストをみつめ、“おいでなさい”というキリストの言葉(ロゴス)を信じて、舟に向って水の上を歩いてゆくことが大切だ、と適切に示している。「信仰とは何か」が、難しい神学的議論ではなく、この説話やペテロの行動によって眼前に見るように具体的に教示されるのである。

この図像も一般的であり、人々に愛され、馴染み深いものであるが、Dura のこの絵が普通の同類型の絵と異なっている点は、舟が特別に大きく、ガリラヤ湖を渡るどころでなく、地中海でも航海できそうな大型船であることと、その大胆な構図にあると言えよう。キリストは左に、ペテロは右に描かれ、キリストはヒゲがあり、髪もふさふさしており、その服装からキリストとして示されるが、後光は描かれていない。洗礼をうけてキリスト者として新しくこの世の波風の只中を歩み始めようとする者にとって、この絵のメッセージはまた適切なものと言えよう。

5. 「墓と5人の女」

北の壁面の下段いっぱいに「墓と5人の女」の、多くの問題を含んだフレスコ画が描かれている。まず、左手にある家のようなものが何か、ということが問題であるが、多くの学者は一応「墓」であろうと考えている。次に現在は3人の女しか絵は残っていないが、破損した部分にかすかに足が残っていて、本来5人の女性が描かれていたものと考えられている。女性たちは右手に松明をもち、左手には軟膏の入った壺をもっている。服装はかなり異国風というべきか、パレスチナ風ではなく、当時の Dura の服装であろうか。さらに墓の右上と左上とに大きな星が輝いている。上述したように、この壁面に続く東側にも、現在では失われてしまっているが、同じような5人の女性が描かれて、北壁の右隅に開かれた扉があり、東壁の女性たちは墓へ近づこうとしている様子が描かれていたと推察されている。墓の両上端にかかる大きな星は K. Weitzmann の前出の本によれば、天使を表し、訪ねて来た女たちに、主はすでに甦り給うてここにはおられないことを告知しているのだという。他に類例を見ないこのユニークな図像は C. H. Kraeling によって Tatian の *Diatessaron* に基づくものであることが明らかにされている (C. H. Kraeling: The Christian Building: The Excavations at Dura-Europos.

Final Report, 8, Pt. 2. New Haven, pp. 86–88 参照)。この *Diatessaron* は 150 年頃グノーシス派のタティアノスが四福音書をひとつの連続した物語に編集したもので、早くからシリアル語の諸教会で広く用いられ、5 世紀まで福音書の標準版とみなされていた(教文館発行『キリスト教大事典』昭 38 による)。私も一度この *Diatessaron* を調べてみたいと願いながらその機会を得ずにおるので、間接的な報告にとどまることをお詫びしておきたい。聖書的なテキストは、復活の朝早くキリストの墓に急ぐ女たちの物語(マタイ 28:1–10, マルコ 16:1–13, ルカ 24:1–12, ヨハネ 20:1–18)であり、それにマタイ 25:1–13 の「十人のおとめ」が重ね合わされたものと言うことができよう。

表象される思想的内容は、キリストの十字架の死という絶望の暗黒の中で、それでも女たちはキリストの墓へと急ぐ、手には香料、あるいは没薬・香油の壺を携えて。しかし夜の闇、あるいは洞窟の中は明りを必要とする。ところがその中に明るく星が輝き、天使が“あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか”と問う。他方「十人のおとめ」のたとえは、神の国に向っての準備を語る。賢いおとめも愚かなおとめも(思慮深い者も思慮が浅い者も)、疲れと暗闇(絶望)の中では眠りはててしまう。人間の思慮や知恵や能力には限界がある。しかし、限界があるからこそ信仰という油(あるいは聖霊の助け)を準備しておくことが必要なのである。信仰は決して現実から離れたところにあるのではなく、この世の現実の中でこそ信仰の営みがあるのである。アブラハムは行くところを知らずして神の都をめざしたが、現実に漂泊しながら神の国へと向い、この地上に生きながら、旅人・寄留者であることを告白した。キリストにおいてそのことは一層真実である。神の子でありながら人の子として飢え疲れ苦しみ、最後には十字架の死を遂げて復活する。キリスト者はこの地上をしっかりと生きて神の国へと歩み出すのである。闇の中に星は輝き、天使は告知して“主は甦られた”と讃美する。

6. 結び

少なくとも 8 つ以上あったと考えられる壁画群も損傷と消失のため、Dura のキリスト教教会所の洗礼室にあった壁画群の全体像を語ることはできないが、残存しているフレスコ画を一応概観して、この最古の、しかも東方系のキリスト教美術の意義を考えてみたい。

第 1 に、先に引用した、あまり radical でもない日和見的な生ぬるい信仰をもったキリスト者が芸術家(技工者)のパトロンとなって何かを製作させたという西方系の美術(埋葬に関係した美術)とは異なって、Dura のキリスト教美術には、真剣なキリスト教的実存への取組みの姿勢が明らかである。洗礼室の壁画という面もあって、一層その点は強烈である。第 2 に、ある有力者が自分の記念や趣味によって生み出した美術ではなく、Dura の美術は Community の美術であり、Community Church の信仰告白としてある点に注目しなければならない。第 3 に、神学的に見て、そこには Syncretism の影はない。明確なキリスト中心の贖罪・救済史的思想が見られる。

キリスト教の中心はキリストを救い主とすることであり、それは十字架の死と復活によって具体的に裏付けされる。しかし、新約聖書においても神学思想史においても、神の子、救い主、

キリストの十字架上の死をどのように理解するか、死人の復活という出来事をどのように理解するか、ということは決して簡単なことではない。図像学的にも「十字架の刑死」はなかなか出現しなかった。それはあまりにも残酷であり、一般的・常識的宗教感情を逆なでするものであったからである。「復活」も図像学にとっては極めて表現しにくいテーマであり、かつ他からの批判や反論を喚び起しやすい事柄である。その間の事情については Graber : Christian Iconography, pp. 123–126 や Anna D. Kartsonis : Anastasis, The Making of an Image. pp. 11 などに詳しい。そこで、西方ではギリシャ・ローマ神話からアポロ、ヘリオス、オルフェウスなどの像を借り、天の戦車 (Chariot) などの表象を借用し、聖書的には旧約聖書からヨナやダニエルなどの姿を通して、キリストの復活を表現しようとした。復活は不死や永生と同一ではない。バビロニアやエジプトでは古くから不死・永生の宗教観念は馴染み深いものである。Anastasis は Resurrection や Auferstehung などと同じように、Descent into Hell, Harrowing of Hell, Descensus ad Inferos, Descente aux Limbes, Höllenfahrt, Headesfahrt, などと通常呼ばれている (Anna D. Kartsonis: Anastasis (op. cit.) p. 4)。その含みの多い内容を正確に規定してゆくことは大変難しい問題であり、事実、教会自身がその多様性の泥沼の中にはまっていったことは歴史が示す通りである。しかし、ここで明確にしておかなければならぬ重要な点のひとつに、本来の（旧新含めての）聖書的思想には死や冥界（死後の世界）を神秘化・神聖化する思想はないことがある。すなわち、佛教的な彼岸思想はないのである。宗教が生きている人間に仕えることをしないで、死んだ人間に仕えることに重点をおき始めると、汚れ腐ってゆく。復活は人間の罪・実存・死の克服の問題であって、決して単なる永生思想や彼岸願望なのではない。死は被造物としての生物が必然的に迎えるひとつの事実であるにすぎない。生を離れて死があるのではない。

ここで Adam と Eve の問題が登場てくる。既に使徒 Paul がその書簡の中で取りあげているように、キリストは第 2 のアダムとされ、創造一墮罪一贖罪（再創造）の救済史的図式が提示され、その関連においてキリストの十字架の死や復活が罪と死の克服として語られる。上記の Anna D. Kartsonis の Anastasis の中で、キリストの復活はアダムの贖罪・復活であり、それはひいては人類すべての贖罪・復活を意味する、と語られている (pp. 5) ことは、図像学的な象徴性においてその通りであるが、神学的にはキリストの十字架の死と復活がいかにしてアダムの原罪を贖うことになるのかがもっと深く追求されねばならない。Dura の洗礼室の「よき羊飼とアダム・イヴ」のフレスコ画は、罪とその贖いの問題に関して真剣であることを物語っている。殊にアダムとイヴが知識の樹の下によりそって立っている足許に「蛇」がはっきりと描かれていることは、一層そのことを印象的にしている。Dura のこの絵は、創造一墮罪一贖罪一新創造・新生命の救済史的図式を明らかにしつつ、特に（洗礼室という状況とも相俟つて）、贖われた者がいかにして新しい生命を歩むか、ということに注目している。これは、既に見て来た他の壁画群を貫く一貫した信仰的姿勢であると言える。すなわち、西方に見られる神話的理解でもなく、葬儀的装飾でもなく、また後の神学論争（ペルソナ論争他）に見られるような観念的理解でもなく、あるいは宗教的願望や情念としての永生・彼岸の思想でもなく、こ

の世（アイオーン）の中を歩きながら、神の国（バシリヤ）を生き、それへと向う緊張関係を Dura の壁画群は示しているのである。そのことをさらに強く印象づけるのは、洗礼へと至るプロセッションの儀式である。恐らく信者たちは受洗志願者を中心にして行列を組み行進したと考えられている。“レヴィ＝ストロースは、生に意味をあたえるマトリックスがかならず存在し、それは神話や図像のなかに象徴的にあらわれているものだけれど、同時にそのマトリックスは、遺伝情報や生きもののかたちや神経パルスのなかにまで貫通しているものなのだ、と語っています。つまり、彼のいう意味のマトリックスとしての構造は、けっしてひとつのレヴェルに実体化することのできないものなのです。そういうマトリックスを反復することによって、生が意味あるものとなる”（中沢新一：『イコノソフィア』, pp. 159–160, 河出書房新社）。シャーマニズム文化や佛教などと異なって、聖書的信仰の場合、そのマトリックスは啓示と救済の歴史である。Dura の Jewish Synagogue の数多くの壁画も、モーセや預言者たち、そして救済の歴史が描かれていた。そしてこの洗礼室の壁には、キリストを中心とした明白な救済的啓示と約束が描かれていて、その“多くの証人たちに雲のように囲まれて”（ヘブル12：1）、彼らは洗礼という新しい生への出立の儀式の中に進み入るのである。

先に、ディアスポラのユダヤ人たちが Hellenism 文化、Syncretism の世界に生きながら、いかにしてユダヤ人としての identity を確立するかについて、アレクサンドリアのフィロンたちが真剣に努力したことを見て来たが、Dura の小さき群であったキリスト者たちが、いかにしてキリスト教徒の identity を見出そうとしたか、Dura の壁画群は証していると言えるであろう。当時の具体的な宗教的・文化的・政治的状況をしっかりと見定めるとき、われわれは、彼らの信仰的努力と告白の表出を正しく受けとめ、かつ理解することができるのである。

参考文献

- Goodenough, E. R. : Jewish Symbols in the Greco-Roman Period. 1953 et seq.
(vols. 9–11, Symbolism in the Dura-Synagogue). Princeton U. P.
- Sivan, Hagith, S. : The Paintings of the Dura-Europos Synagogue. The New Haven Jewish Community Center, 1978
- Grabar, André : Christian Iconography, A Study of Its Origins. Princeton U. P., 1980
- Weitzmann, Kurt ed. : Age of Spirituality. The Metropolitan Museum of Art & Princeton, 1978
- Weitzmann, Kurt ed. : Studies in Classical and Byzantine Manuscript Illumination. Univ. of Chicago Press, 1971
- Weitzmann, Kurt ; Loerk, William C. ; Kitzinger, Ernst ; Buchthal, Hugo : The Place of Book Illumination in Byzantine Art. Princeton U. P., 1975
- Badawy, Alexander : Coptic Art and Archaeology. Massachusetts Institute of Technology, 1978
- Van der Meer, F. : Early Christian Art. Faber & Faber, London, 1959
- Beckwith, John : Early Christian and Byzantine Art. Penguin Books, 1970
- Krautheimer, Richard : Early Christian and Byzantine Architecture. Penguin Books, 1965
- Yves Christe ; Tania Velmans ; Hanna Losowska ; Roland Recht ; (edited by Jean Hirschen) : Art in the Christian World 300–1500, A Handbook of Styles & Forms. Faber & Faber, London, 1982
- Wellesz, Emmy : The Vienna Genesis. Thomas Yoseloff, 1960

- Hopkins, Clark : The Discovery of Dura – Europos. Yale U. P., 1979
- Strzygowski, Josef : Origin of Christian Church Art. Hacker, 1979
- Hulme, Edward : Symbolism in Christian Art. Brandford Press, 1976
- Kartsonis, Anna D. : Anastasis, The Making of an Image. Princeton U. P., 1986
- Levine, Lee I. ed. : Ancient Synagogues Revealed. Wayne State U. P., 1982
- Browning, Iain : Palmyra. Noyes Press, 1979
- Gnough, Michael : The Origin of Christian Art. Praeger, NY., 1974
- Syndicus, Edward S. J. : Early Christian Art. Burna and Oates, London, 1962
- Lowrie, Walter : Art in the Early Church. revised edition. Norton, 1969
- Morey, C. R. : Christian Art. Norton, 1958
- Moore, Albert C. : Iconography of Religion. Fortress, 1977
- F. Legge, F. S. A. : Forerunners and Rivals of Christianity, Being Studies in Religious History from
330 BC. to 330 AD. Peter Smith, 1950
- McClinton, K. M. : Christian Church Art through the Ages. Macmillan, NY., 1962
- Schiller, Gertrud : Iconography of Christian Art. 2 vols. Lund Humphries, London, 1971
- Frend, W. H. C. : The Early Church. SCM., 1982
- Hengel, Martin : Acts and the History of Earliest Christianity. SCM., 1979
- H. J. Blumenthal and R. A. Markus(ed.) : Neoplatonism and Early Christian Thought. Essays in
Honour of A. H. Armstrong. Variorum, London, 1981
- O'Meara, Dominic I. (ed.) : Neoplatonism and Christian Thought. State Univ. of NY., 1982
- Leaney, A. R. C. : The Jewish Christian World. 200 BC. to AD. 200. Cambridge U. P., 1984
- Claster, Jill N. : The Medieval Experience 300–1400. New York U. P., 1982
- Moon, Warren G. (ed.) : Ancient Greek Art and Iconography. Univ. of Wisconsin Press, 1983
(特に Karl Schefold "Some Aspects of the Gospel in the Light of Greek Iconography")
- 矢島文夫 : 『神の沈黙』, 人文書院, 1983
- 松本富士男 : 『イエスの原風景』, 新泉社, 1975
- アト・ド・フリース : 『イメージ・シンボル事典』, 大修館書店, 1984
- その他

(原稿受理 1990 年 9 月 6 日)